

# 道 徳

北川 忠

## 1 道徳における「知識創造」とは

道徳における知識創造とは

道徳教育の目標

\*1 学習指導要領「第3章道徳」の

【第1目標】

道徳性

\*2 「道徳性とは、人間として本来の在り方やよりよい生き方を目指してなされる道徳的行為を可能にする人格的特性であり、人格の基盤をなすものである。それはまた、人間らしいよさであり、道徳的諸価値が一人一人の内面において統合されたものといえる」

『小学校学習指導要領解説 道徳編』平成11年 文部省(当時)

道徳性の発達

\*3 「道徳性は、生まれたときから身に付いているのではない。人間は、道徳性の萌芽をもって生まれてくる。人間社会における様々な体験を通して学び、開花させ、固有のものを形成していくのである。」

『同上』

道徳的価値

\*4 ここでは、友情・勇気などについてそれぞれ個別のとらえ方を指す。

道徳における知識創造を次のように定義することにする。

「かかわり」を通して道徳的価値の深まりに気づき 道徳性を高めていこうとする営み

道徳教育の目標は、学校教育全体を通じて道徳的心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うことである。<sup>\*1</sup>小学校では幼児期における道徳性<sup>\*2\*</sup>の芽生えを促す指導を踏まえて、人間としてよりよく生きるための方法を様々な体験や学習を通して学び、一人一人の基礎的な道徳性を確立していくことが必要である。また、道徳性は生まれたときから身に付いているものではないが、だれもがよりよく生きようとする心を持っている。<sup>\*3</sup>このような心が自分にもあることの気づきを促し、その心をもっと伸ばしていこうと意欲を喚起させることも、道徳性を育てる上で大切なことである。

知識とは、経験や学習の中から認知されてきたものの総体である。人は自分の持つ知識を参考にして判断し行動している。この行動を促す知識を支えているものが道徳性である。個人の持つ道徳性は、生まれ育った環境において違いがあり、そこから人による様々な行動判断の差異も生じてくる。道徳教育の要として行われる道徳の時間では、自分や友だち、社会集団や自然などのかかわりを通じて、よりよく生きることをともに学ぶ。社会の中で人は、一人で生きていくことはできない。人と人がともに学ぶという「かかわり」によって、自分とは異なる感じ方や考え方と出会うことができる。この差異について互いに自分が持っていた道徳性をもとに「かかわり」あうことで、新たな気づきがそれまで自分が持っていた道徳的価値<sup>\*4</sup>という本にある時は新しいページとして付け加わり、ある時は一部分書き直されて全体が更新されていく。更新された道徳的価値は新たな道徳的心情の気づきを育てる手助けとなり、以前の道徳的価値に広がりや深まりが生じていることに気づくことができるのである。

## 2 道徳における「かかわり」の活性化とは

子ども一人一人が持つ価値観に対して、交流が起きる場면을重視する。ある事象に対するさまざまなとらえ方を出し合い、互いの価値観を比較することで、今まで持っていた道徳性が揺さぶられる状態である。

## 3 「かかわり」を活性化するために

視点を変える

\*5 「子どもが健全な発達段階を歩んでいくためには、自分だけでなく自分の周りの世界を理解することが必要である」『VLFによる思いやり育成プログラム』渡辺弥生編集 図書文化社

子どもが自覚していなかった道徳的価値のすそ野の広さに気づかせるには、自分以外の視点に立って考えるという活動が有効な手段の一つである。<sup>\*5</sup>「自分」「あなた」「その他の人」というように視点を変えて考えることで、今まで気づけなかったとらえ方があることに気づき、それまでの道徳的価値に広がりや深まりが生まれる。そして新たな気づきに加わることによって、子どもの内面に道徳的価値の自覚が深められていく。このプロセスを作り出すために、次に述べる手だてを行っていく。

### ・ 資料選択、提示方法、導入の工夫

導入部の工夫

授業の初めに、教師が授業でねらう道徳的価値に関係した内容について、自分自身が体験した話をする。このとき、教師がどのように考えどう思ったか、も併せて伝える。教師の体験談を聞くことから、子どもは教師の視点を知る。そして、同じような体験をしたことがないかを問いかけ、そのときどう思ったかについても問いかける。友だちの話聞くことで友だちの視点を知ることができる。ここでは、授業でねらう道徳的価値について気持ちを向ける導入部の役割を果たすと共に授業に当たって子どもの心を柔らかくするねらいがある。また、子どもの体験を問い返すことで本授業以前に子どもが持っている道徳性を確認することもできる。

## 資料

\*6 副読本や絵本、教師の自作による話を指す。ロールプレイングを取り入れた指導では、内容に葛藤する場面を取り入れた方が効果的である。

## 役割取得能力

\*7 相手を思いやり、理解する能力のこと。対人間に生じた葛藤の解決や高いレベルの道徳的判断を行う前提になる

## ペア活動

\*8 「ペアは、役割取得能力の発達段階が同じレベルで行動のタイプが違うもの同士がよい。役割取得能力は、幼児期から青年期まで五段階ある。また、対人交渉方略(行動のタイプ)には、相手を変えようとするか、自分を変えようとするかの二種類がある。いずれもソーシャルスキルや観察によって判別される。」『Voices of Love and Freedom』(Selman, R. L) 1995  
ただし、ここで判別される役割取得能力は、子どもの道徳性を評価するために用いるものではない。

## ロールプレイング

\*9 役割演技。役を演じ、他人を通して心の奥をのぞくことによって、意識していなかった自分の心を意識したり、役を演じ語ることによってカタルシスを感じたりできる。このときには、場面の設定や役を演じるのだという意識を明確にするなどに配慮する必要がある。『小学校新道徳授業の基本養護辞典』上杉賢士編著 明治図書

## 価値の自覚化

\*9 「資料中の人物に自分を重ねて、その人物の心情を通して自分の心情を深めたり、考え方を深めたりする場合は、価値の自覚をめざすことになる。価値の自覚をめざすのであれば、筋道をはっきりさせている構造化方式の方が、よりシャープな指導をすることができる。」『道徳授業の基本構造化理論』金井 肇 著 明治図書 1996

## 書く活動

## 道徳的実践力の芽生え

続いて使用する資料\*6の内容は、子どもの発達段階を考慮に入れて選択するが、子どもが身近に感じられる資料を選択・使用することで、資料の世界に引き込んでいくことができる。そのためには理解に時間がかからず、登場人物の心情がわかりやすい資料が適している。また、場面絵や視聴覚機器の使用などのさまざまな資料提示の工夫も大切である。

### ・ペア活動、グループ活動を効果的に用いて、差異に気づかせる

「かかわり」を活性化させるには、異なった考え方(役割取得能力\*7)を持つ子どもをペアやグループにすると効果的である。ねらいとする道徳的価値に迫る部分では、構成的グループエンカウンターによる手法やペアによるロールプレイング\*8を用いることにより、挙手による発表だけでは引き出せない様々なことばかけの例や行動の例を子どもから引き出すことができる。役割を交代して行えば、子どもは、「自分」と「あなた」、「その他の人」の視点に立つことができる。引き出されたロールプレイングは、代表者に全員の前で演じさせる。また、自分たちの考えとは異なった例についても、代演させて比較させる。このロールプレイングを見ることで、子どもは第三者の視点に立って、比較しながら見ることができる。

子どもは、自分を取り巻く「ひと・もの・こと」と体を通してかかわることによって、さまざまなことを感じ取っている。この感じたことのあらわれが表現である。一人一人が対象とのかかわりによって感じることに、正邪はない。むしろ、既存の知識、概念にとらわれず、自然に集中することでより、素直に感じる事が得られるのである。

### ・「かかわり」の有用性を自覚させ、シェアリングにより定着をはかる

引き出された様々な考え方について、「なぜこのように言ったのか。」「この言葉は、どういうことなのか。」など発言の心情や意味について見つめ直させる。発言について「自分・あなた・その他の人」と視点を変えて観察しているので、言ったときの気持ちや言われた方の心情、また、外から見ていてどう思うかなどの評価が、発言の意味に対して理解を進めやすくする。

こうした発言について理解しようとする活動の過程においては、子どもの発達段階によって教師の支援が必要となる場合も考えられるが、子どもは自分の今までの考え方とは異なった考え方が存在することに気づき、これまでの自分の考え方と比較させていくことで、子ども自身が持っていた道徳的価値について、深まりや広がりが発生していることに気がつくことができる。表出される結果から見たとき、子どもの意見がよりよい方向へ改善することもあれば、意見に変化がない場合もあるだろう。しかし、自分の考え方以外のとらえ方を知ることによって道徳的価値についての深まりや広がりが発生しているのである。そして、多くの意見や考え方の中から自分が最善と思うかかわりはどれかを見つけ出し、選んだ理由についても発言させる。このような子ども同士のかかわりを通して、子どもの内面で道徳的価値の自覚化が深まっていくのである。\*9

また、考え方に変化があったかどうかについて自分をふり返り、文章を書く、絵を描くという表現活動を通して、自分の心に内在化した思いを表現する。日記(自分の視点への気づき)、手紙(相手の視点への気づき)、物語の続きを書く(第三者の視点への気づき)など、子どもの実態や資料に応じて表現方法は様々である。学習を振り返り、自分自身を見つめ表現することによって更新され、広がり深められた道徳的価値はより強く心に記録されることだろう。また、自分の日常生活の様子や実態をフィードバックしながら振り返る活動も必要である。この記録は、自分のファイルに保存することで、子どもはいつでも見直すことができる。そして、学習した内容について学級通信や個別な連絡などで家庭とも連携をとることも含めて、家庭と共に子どもの道徳的実践力の芽生えを期待していきたい。